

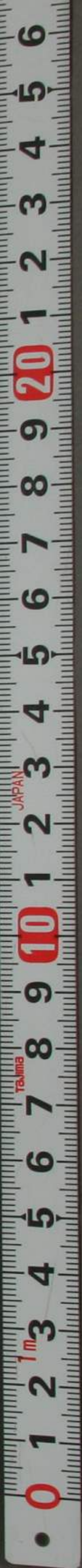


関ヶ原軍記

二編 壹

貳

遠13  
2207  
16



所へ遠 13 特  
編 2207  
是 16

凡士農工商も夫々の職分家業を固て持用の良物を言ふ  
今日と管む夏世果一般の然るに世字本の春中小解の白紙  
何れ種々の書入又ハ秋之覚來るまで本偶人感見甚き  
男女の陰癖をも画き君臣父子の中やう面を赤め合事  
同く多し是等ハ必竟一時の興小察しての戲言やんは係  
其職分此道具ハ疵付のハ僻をかり著述拙く筆者の誤り  
何れも只言語と云く其遇ちを各々巻中の戲画樂書等ハ後  
池田屋常以是と歎然然不復源一固て系代りて諸君子祈るる爾  
磨石山人識

和漢

貸本所

東京牛込細工町

誠光堂

池田屋清吉

池清

關ヶ原軍記其編惣目録

卷之七



淀殿 石田三成 称誉ある事  
并 金吾秀秋 三成が奢心 怒  
らる事

一 石田三成 軍配之軍  
并 諸將 三成の下向 侍事

卷之貳

一 石田三成 大津へ行て京極高次へ

對面之事

并 安養寺 石田越討んと勧る事

一 細川幽齋 田辺乃城を守る事

并 勅使に仍而田辺の寄手退く

事

卷之三

一 山口玄蕃 允加州家乃使者に返

答之事

并 前田家評定出陣之事

一 加州勢 小松乃城を攻取固む事

并 前田勢 大聖寺の城に押寄

せし事

卷之四

一 山口右京亮 加州勢と戦ふ事

并 右京亮城中に引入事

一 富田藏人由緒畧傳之事

并 藏人加那家と召抱へらる事

事

卷之五

一 加那勢 大聖寺乃城攻責ん事

并 山口右京亮大勇猛攻頭ハ事

事

一 富田藏人魁け討死之事

并 山口右京亮再度大勇戦討死

之事

卷之六

一 大谷吉隆謀計と施す事

并 前田利長居城金澤引入事

一 神君野呂小山と上方蜂起

聞し召す事

并 御評定之席に福嶋正則發言

之事

卷之七

一 神君再度軍御評定之事

并 外様大名三拾三銘

徳川家の御味方ニ付事

一 結城秀康卿 神君に諫め

奉ル事

并 神君御不真之事

卷之八

一 神君會津表あいづあけて押おき一の勢いき決定さだま給たま交まじ

并 福嶋正則 神君乃御一言ご

伏く従ち事じ

一 吉村又右衛門軍利ぐりを述ふ事じ

并 神君江戸表ごんに御馬入ごまいりの

事じ

卷之九

一 神君嶋田治兵衛しまるぢを以もて伊達家いだけに

御使者ごしや之事じ

并 政宗關東まさとくに御味方ごみかた決定さだま之事じ

一 關東の大軍くわんと尾州清洲びしゆせいしゆに着陣ちやくぢん

村越茂助 上使かみし乃事ごと

并 藤堂高虎御請とうどうたかと村越むらご名譽なご之事じ

卷之拾

一 關東乃諸將岐阜城責評定之

事

并本多忠勝 加藤嘉明爭論之事

一 嶋左近主人石田之諫言之事

并三成諫めと入るに及んで出勢

大垣城に着事

卷之拾壹

一 西國勢青野ヶ原陣取之事

并大垣城中乃怪吳石田が宣心に

付入事

一 嶋左近妖怪以様更事

并左近妖怪退治之事

卷之拾貳

一 三成 織田秀信 味方 廿人 謀

事

并 赤星内膳 侍 辨 秀信 感 事

一 波身 秀信 石田三成 合體 事

并 波身 撤中軍 評定 事

卷之拾三

一 關東 勢清 淵 立 岐身 押寄 事

并 黒田村 百姓 共領主 一 柙 助

けん 斗 事

一 百姓 共 柙 籃物 川 渡り 案内

者 成 事

并 關東 勢 一 同 川 渡 事



卷之拾四

一新あらた加納かの合戰あはれ之事

并ひら一いつ押おし監物けんぶつ勇戰ゆうせん之事

一池田いけだ備中びちゆう守しゅ御ごきのき之事

并ひら岐阜ぎふ勢物せいぶつ惣そう敗軍ばいぐん之事

卷之拾五

一岐阜ぎふ麓城ろくじょう之事

并ひら城中じゆうぢゆう年ねん配はいリり之事

一竹たけヶ鼻がな落城らくじょう杉原すぎはら五左衛門ござゑもん生害せいがい

之事

并ひら岐阜ぎふ城じょう追お手て合戰あはれ津田つた猛勇もうゆう

頭かぶして吉村きちむら討うつ事

卷之拾六

一 木造左衛門佐追年と防ぐ事

并 福嶋勢勇戦追年战来取事

一 吉村又右衛門岐阜乃町家江

火越越事

并 池田輝政水乃千曲輪江押

誥事

卷之拾七

一 田宮治郎左衛門 主人輝政

諫む事

并 京極丹後守思ハガ高名之事

一 岐阜落城秀信降参之事

并 福嶋 池田口論加藤左馬之助

扱ひの事

卷之拾八

一 藤堂高虎とうどう たかたけ又また黑田長政くろだ ながまさ之謀略をまがらみ也

述ゆゑ此事

并後藤又兵衛基次ごとう またへいゑ きち之事

一 後藤又兵衛ごとう またへいゑ黑田長政くろだ ながまさ之謀計をまがらみ也

教しゆ此事

并江渡川えいわたがわ満水みづみ之事

卷之拾九

一 田中吉政たなか よしまさ僧に瀬蹈せお之をて江渡えわた

川がわ之押渡おしわた之事

并後藤基次ごとう きち同に田中たなか之續つづく事

一 藤堂高虎とうどう たかたけ川渡がわわた之事

并田中勢たなか せい石田方いしだ ほう之先年さきねん之突入つっしり

事

卷之貳拾

一 後藤又兵衛勇猛あつむ取頭あしひ之事

并石田小西乃先まは手て敗軍まへ藤堂高

虎赤坂の宿あや取と堅かむむ之事

一 嶋左近づん辨べん舌ぢ嶋津義弘よしひろ乃怒いりと説と

事

并後藤先見ごとうのさきみ嶋津中務しまつちゆうむ開城あひら之事

卷之廿壹

一 徳川源君御謀畧とくがわのみなと諸將しよしやうを励まげし

給たまふ事

并源君關東みなとを御進發ごしんぱつ之事

一 濃州のうしゆの瑞雲寺みづうんじより大柿おほかき献上けんじやう之事

并石田の黨たう天守てんしゆをとりて徳川家

御進發ごしんぱつの様子ようしを窺うかがふ事

卷之廿貳

一 大谷吉隆 神君乃御明智尖

一 大谷石田三成之語ル事

一 并金吾秀秋偽言 大谷氏欺く事

一 徳川源君御備配リノ事

一 并嶋左近南宮山乃毛利 長曾

一 我部等ニ通むル事

卷之廿三

一 笠縫提合戦之事

一 并中邑勢嶋友行が爲ニ敗軍

一 之事

一 嶋が軍謀圖子當ル事

一 并井伊直政勇と震つて味方

一 戦引揚ル事

卷之廿四

一 蒲生備中の言之事かみづのいひ

并石田三成大垣城出張之事いしださんせいおおいのきやうしやう

一 石田治少關ヶ原ニ出て軍勢配當いしだぢしやうせきがはらにいでてぐんせいはいとう

之事

并内府公御謀略若殿原城廨かきやうきやうごのりやくわがとのらきやう

給フ事

卷之廿五

一 井伊直政 福嶋正則いゝのちかまき ふくしまのり

并井伊直政 本多忠勝いゝのちかまき ほんたのちかたけ

之論

一 關ヶ原大合戦せきがはらおほいあひあひ

并井伊直政 淳田勢と鹿番いゝのちかまき じゆんでんせいとしかばん

合戦之事

卷之廿六

一 淳田秀家 福嶋正則合戦之事

并 吉村又右衛門剛勇福嶋方

足並越直之事

一 福嶋が家臣別所氏部篤病の

事

并 別所が忠義後二頭之事

卷之廿七

一 嶋新十郎勇越震つて桑山

村越ホと戦之事

并 關東勢敗軍之事

一 嶋左近 京極勢と合戦之事

并 新十郎 極京勢破之事

及 堂勢と戦之事

卷之廿八

一 嶋左近藤堂伊井本多本乃勢拔返

并嶋新十郎夏藤堂玄蕃と討て

其子常刀と討て事

一 大谷吉隆諸陣の様子と湯浅五助

と尋ねる事

并吉隆金吾が愛心城懐儿事

卷之廿九

一 金吾秀秋大谷の陣に裏

切之事

并秀秋大敗軍之事

一 金吾脇坂朽木秋月等大谷

爲て再度敗走之事

并關東乃大軍大谷吉隆取巻返



卷之三拾

一 大谷吉隆寂胡之事

并湯淺五助敵勢討破つく

主人吉隆の首かみ取と隠かく事

一 藤堂仁右衛門湯淺の頼たの事

兼あ諾が事

并仁右衛門五助の首かみと討取と事

貳編

惣目録 平

池清

関ヶ原軍記貳編卷之七

目録

一 淀殿 石田三成と称誉の事

并 金吾秀秋 三成の奢心と怒る事

一 石田三成軍配の事  
并 緒将 三成の下向次侍事

池清

園ヶ原軍記武編卷之三

從<sup>しん</sup>度<sup>の</sup>石<sup>い</sup>田<sup>で</sup>之<sup>の</sup>成<sup>じやう</sup>と稱<sup>せう</sup>譽<sup>よ</sup>の事<sup>こと</sup>

并<sup>ま</sup>全<sup>ま</sup>各<sup>ご</sup>秀<sup>しゆ</sup>秋<sup>あき</sup> 三<sup>さん</sup>成<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>委<sup>あ</sup>任<sup>ん</sup>を

怒<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>事</sup>

去<sup>し</sup>程<sup>じやう</sup>ふ依<sup>よ</sup>見<sup>み</sup>博<sup>はく</sup>後<sup>ご</sup>所<sup>しよ</sup> 幸<sup>あ</sup>れ<sup>ん</sup>を

子<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>麻<sup>あ</sup>大<sup>だい</sup>坂<sup>さか</sup>博<sup>はく</sup>肉<sup>にく</sup>の<sup>の</sup>秀<sup>しゆ</sup>彰<sup>ちやう</sup>卿<sup>けい</sup>

乃<sup>な</sup>母<sup>ぼ</sup>堂<sup>だう</sup>造<sup>ぞう</sup>の<sup>の</sup>女<sup>によ</sup>成<sup>じやう</sup>乃<sup>な</sup>流<sup>りゅう</sup>石<sup>せき</sup>也<sup>なり</sup>

以てくろく、大にきり、よるこび  
あひ地皮依足、所博をちや、園  
東子、入り  
内府公乃西  
滅亡も且夕、有と名、石を是  
刈ち女、くろく、野り、北野の農  
まれば、その家、裏微、まるとい、わさ  
地を味、あうり、志、うら、に、は、せ、り  
石田、治部、少輔、が、事、と、大、ひ、こ

感、ト、あ、ひ、ま、り、に、太、田、田、地、界、  
後、冥、森、の、沖、威、光、目、小、野、り、て  
以、却、手、に、秀、頼、の、娘、孫、を、石、滅、亡  
ま、い、し、て、ん、り、と、葉、子、の、名、の、  
と、こ、ろ、子、田、忌、乃、人、と、大、勢、あ、る  
手、中、に、石、田、の、成、謀、略、の、つ、て  
奥、州、乃、上、杉、系、孫、の、て  
内、府、公、乃、款、射、さ、せ、孫、の、取、を、執

させ又物玉幣とりりて既  
小武拾万人乃軍乞城氏  
伏見の城責罵しある事  
起りし事又初主秀頼乞城  
補佐まゝといふ一人ありて  
内と取く由書とむりり秀  
頼乞乃由感状をも浪度のは

長と経りり頼又内と由下知ある  
の南時ゆむれ徳大お大所  
小結し人をめりち毛打中納言  
輝元 浪田中納言秀家本ある  
ゆゑ遠慮もあすべく名しめさ  
るゝの条危角三成り持手小  
指揮しつ次つとるり徳とは交  
此軍功も偏り古太容の再来

秀頼卿を物事ありと名りし  
子のいさむらひ千幸ちかゆきと名りし  
大軍と起して関東越亡候  
て下一統ひとつを初はつに北下知しる人  
まありし徳人誰彼も入いり  
せ又幸ちか急いそ毛もはままくく南みなみ付つ  
徳旨とくしを私ひそにに言いふ中なかあられ  
結むすぶ決けつ裁さい判はんして関東越亡候を

推おし深こ物もの大おほ崎さきと名りし  
あり元もと来らい功こう名なを好このみ飛と騨ひと  
好このま奢あや才さい一ひと乃の石いし田でんして花はなを  
年とし三さん十九じゅう才さいの壮さう年ねん之の今いま物もの事こと  
此こゝ徳とく軍ぐん勢せいのここととくく之の故ゆゑに  
相あ随ずいいふふ西にしへへくく  
ぬく関東乃御威光のつつまま  
るるののいいふふののししのの平ひら押おしよ

孫利せきりとてと名ひあつたり  
とろろろと奔あせりこのうへもあは  
事しと名ひあつた石田が科とがなり  
河くばとてく渡及の形かたちも  
あつた女とてあつた奔あせり  
三加もは藤内を越え慕まほむりし  
あつた大いなり悦よろこび給たまひあ  
たしとてあつた地ちとてはうびれ

惣大おと憚おそるあつたあつた  
奔あせり出でるの事なり  
形く伏見の城の物もののたき  
内府公是こうん通御産新たにと成なる  
城石田が本陣とお定めあり  
徳大おと対面たいめんもこの時  
伏見の城城をむ人る浮田秀  
家金又秀秋の友人あり

能ん在治部少輔を内意を故  
く秋物とのまおのひく等て  
許容せん亦金吾及を石田く  
對して軍候を讀むべし  
その新へ来るより志るる  
三杯をその内意是るる由  
能ん懐く心を好く床机に  
腰を掛く居あぐり金吾及

そのうび松乃丸此西御  
神妙く是一人秀頼白く一麓  
の内忠良を以て高又雲東追討  
て將軍乞手配りの候を  
裁判いしきべし  
居城佐和山一居り海軍乞  
決意投して徳川大垣の城へ出  
張

徳川及上洛



バ野合の篠原を交さるべし  
又江戸城は籍らるるべし  
より押込つきの先夫まで  
重む度ち三井でしきし出  
しむくとももるげし  
られは秀秋も廿一歳はあ大相  
ちれをえつこの御子不具  
く陣中へ歸りしが大い

いりり三輩るありの那ね部  
のどくく無礼あやや楽る入奉  
けしあしく後世後下れ侍従之  
系る古太閤の子分し  
秀頼の連枝といひ官を中納  
言あり侍中兼前小早川の達  
初奉りし石田が心腹しそむ  
ねし候しおぬくいこのうび

合戦の宴中 宴東北味方と慶  
して石田ありて友ありぬ体  
を交りて友ありぬ体  
軍合戦の年 一と信あり  
この時より海をとりて宴東  
へ返り心を致されたるは  
まろくく石田が志ありあり  
事 起るなり

石田三成軍配の事  
并法將 石田の下向戦あり  
事

曰く石田法將少輔之敵を法將  
會合して法將の志配りと相  
定り軍勢を向くこの時三成  
より大津の城より兵を攻め

款集うこの後分明ありてござる有  
大津の城に入てお伺ぐも後て  
高次乃を長安表す三所在處の  
も石田三成を討んとすこと  
一変をござる肉石田を佐和山陣  
陣を却てくこのせり  
内府公乃所公達ありてびり女  
中乃丹後の圓田色に城に居

ありて後く乞を攻討なりし  
軍急に之万余騎ありて向の城を細  
川遊舟に望くありてお預ぐ  
城あり  
林理より此所扱ひ  
ふ後く款集を退去せし編  
平細川遊舟の智謀あり  
却て徳將ありてあり  
勢向を三成を討別はあは

り繁

云書くはくく実や部  
おとく用ゆる時を虎の威  
何り用ひざる時を福すも  
ふ劣ら或ひと難人そしも  
用ひ奉るる時をいふ事  
此一言も笑あしく發明よ  
もお笑ゆるやど明りこの

せり虎の山千所そぶが  
おとく或ひのまのわきも  
車け役もお勤め人そし  
その言極極と家来よやぞ  
送つてをの機徳をみるん  
と名ひ示す顔色と見て  
もとが人の心あしく  
おのれとて古今も役候

ふれはそのやうな人とな  
ぬり佛一平嵐のどく  
としてつあいな草村とぬらそ  
月頃のそらうがけ懸り  
ゆく尺のくんと人あよそ  
叶のぶら程のうらや  
大分此のの退後とら  
そのまゝ隠居とら之平生

の  
の人をも先生杯をさ教し  
或ひの学者乃種の人  
るやうの時をさくつ子  
人之空おのり別と誓  
るるや或ひさまの道徳  
の律儀純粋とる智識の修  
め者もさよ時を佛菩薩  
れどくは名ひ用ひざる人

ふりませうの時多かれも  
食はれりこと云りんり結る時  
を只人も虎嵐のおどろく  
驚らるりるん人もそも幸  
ひ能く時を虎の威あつて  
まの社のゆるりゆるりも  
利發するもの種發明する人  
もころりりら！らつて不仕

合せの時の勢多し  
石田三成を佐和山より  
今この種を虎の山に  
勢ひあがり

斯くの所々手配り此の  
大台刑部少輔吉隆が評定  
崎友をとお手あつて  
しとく今この時を

吾人の工夫作略と見えきり  
りきく又後及の内意とあり  
人々も三華とお用ゆるあり  
その難し遠慮懐く事も  
相く事ごと小法育れ攻め人殺  
配り本服とと急刺も乞備へ  
石田が大急量ありとお見せり  
又小玉節の惣大将を大谷吉

隆との力をも脱板中務大輔  
小川古終も朽木河内も秋之  
去つる戸田武房も平塚因  
情も糸極も狭も高次も都合  
手幣二万二千余騎皆大谷が  
総下として鐵甲の圓敷誓の  
城も相集ゆるこれも治部少輔  
が下知とて小玉を平均し

和州の利長を押し居りての  
定めあり又丹波の國田辺乃棟  
自細川玄部と棟及孝入及出部  
も  
内府公乃由公達并び小  
女中言と保護するも急攻討手  
として小野木強殿助及抵之  
河守 谷出羽守 小出伴勢守  
高田孝俊守 別所孝和守生

約右近木越大將として二万又子  
余人を急をり 急なる討  
をとり下知事又伴勢守  
とり津松板を攻め居りて濃州  
へ出る田が中知事とおちる  
内府公上洛し於て安否の  
いづれをいへり 又發向する面を  
より毛利宰相秀元 吉川後



河守元喜 安部守元長を去  
東大寺を捕正家 長曾我部義  
内少輔登頼 金吾中納言秀秋  
本郷石田之成が同族として  
全二の合戦をへよとのめんく  
よの浮田中納言秀家 鴨津  
玄庫及義江 小物持津守村長  
鴨津中務を捕家久おる石田

と回トく大垣に在城して  
相待又よとの定りありまも  
将兵兵治の國に在陣して  
治部少輔が下知越おるる西  
よの波牟の城に織田中納言  
秀信 高木十郎 伴及彦を捕  
おるりよの弁勢別業名の  
城よの氏家内膳正八子余人

又妻手持る龜山此城  
是本下野守水口之城  
倅賀守大山之城  
石川倅守福来此城  
威光或郡守倅  
予丸毛三郎守那山  
之城  
大垣之城  
石田三郎守陣  
之本丸  
後守丸二之丸  
丸之垣見和泉

守 惣管内藤物本面  
并び  
小坂守倅及彦守  
守お守  
守 又佐州上田  
之城  
守 真田  
守 安房守昌守  
守 び小次守左守  
守 佐幸村お籠  
守 丸守  
守 石田守城  
守 倅守  
守 武拾万  
守 余人守  
守 物守  
守 勢守  
守 合  
守 年一  
守 面守  
守 物守  
守 節守  
守 たり  
守 あり  
守 も

園東は忠有者もは軍一  
抑身られく唯人てさう次  
石田浪部少輔天晴宮東一  
んもの息子の三姉ありりり

油清

園ヶ原軍記二篇巻のき 油清

油清

園ヶ原軍記武編巻之貳

目録

- 一 石田三成大津よりして京極高次小  
對面の事
- 一 并安長寺石田を討んと候事
- 一 細川幽斎田辺乃城守事
- 一 并 勅使に仍て田辺乃守を退す

池清

園ヶ原軍記武編卷之二

石田三成いしかわ せいせい大津おつより行て京極きやうごく宮次みやじ

小西せいの後ごの事

并あわ安喜寺あんきじ石田いしかわと討うんと初はつの夏なつ

去程きょてい小物せぶつ玉たま方かたに總軍そうぐん勢せい大坂おさか

伏見ふし見支所ししよをまもり立たてて出陣しゅしん

りんべ三城さんじやう平へい居い城じやう佐和山さわやま城じやう

んとして付節は風吹と吹力  
ふ名ひらりりり大津の城を  
東方ぬる時を徳方の通所  
敷して味方大さふ候りとも  
なり候らふ子の言次も志し  
二度少して一変せざる人なり  
沖の世を冥東方も如く  
それよ随つて程也

徳川方出来まへとも計り  
むと工夫して物もかけ  
大津の城一変寄りたる古今  
吾双方例しるも様意者あり  
極意言次更さるる款集方の  
後も知悉ざるに形も不説ぬ  
石田あんなも候へ出さる三子  
ぬ百余人の言士とばしぐく

大津の町<sup>まち</sup>に陣<sup>ちん</sup>を敷<sup>ひ</sup>き對<sup>むか</sup>て小姓<sup>せうじやう</sup>  
を人<sup>ひと</sup>に召<sup>め</sup>つれ大津の城<sup>しろ</sup>の中<sup>なか</sup>へ引<sup>ひ</sup>て  
高<sup>たか</sup>次<sup>たか</sup>と對<sup>むか</sup>面<sup>めん</sup>をとり高<sup>たか</sup>次<sup>たか</sup>を三<sup>さん</sup>  
代<sup>だい</sup>置<sup>お</sup>き東<sup>あづま</sup>へと引<sup>ひ</sup>き去<sup>さ</sup>り物<sup>もの</sup>取<sup>と</sup>り  
目<sup>め</sup>もあむる大<sup>だい</sup>軍<sup>ぐん</sup>あり也<sup>なり</sup>申<sup>まを</sup>す  
人<sup>ひと</sup>と名<sup>な</sup>を折<sup>せ</sup>りあれを産<sup>う</sup>敷<sup>し</sup>  
通<sup>とほ</sup>して後<sup>ご</sup>和<sup>わ</sup>を始<sup>は</sup>時<sup>とき</sup>三<sup>さん</sup>成<sup>なり</sup>り  
りる糸<sup>いと</sup>極<sup>ごく</sup>度<sup>ど</sup>より古<sup>ふる</sup>太<sup>た</sup>閤<sup>あや</sup>の津<sup>つ</sup>縁<sup>えん</sup>

ありく也<sup>なり</sup>知<sup>し</sup>る此<sup>こゝ</sup>秀<sup>ひで</sup>頼<sup>より</sup>の跡<sup>あと</sup>頼<sup>より</sup>み  
名<sup>な</sup>一<sup>いつ</sup>石<sup>いし</sup>とてあり也<sup>なり</sup>は<sup>は</sup>びの石<sup>いし</sup>の  
押<sup>お</sup>へとて内<sup>うち</sup>敷<sup>し</sup>向<sup>むか</sup>りもあ<sup>あ</sup>るま<sup>ま</sup>よ  
今<sup>いま</sup>も内<sup>うち</sup>延<sup>のび</sup>川<sup>がは</sup>世<sup>よ</sup>に流<sup>なが</sup>流<sup>なが</sup>の宮<sup>みや</sup>中<sup>なか</sup>  
あり人<sup>ひと</sup>のこゝろがひま<sup>ひま</sup>時<sup>とき</sup>を流<sup>なが</sup>  
家<sup>いへ</sup>に隣<sup>りん</sup>り之<sup>これ</sup>後<sup>ご</sup>より別<sup>わか</sup>れんる記<sup>き</sup>奇<sup>き</sup>  
人<sup>ひと</sup>盤<sup>ばん</sup>をさされて志<sup>し</sup>るる一<sup>いつ</sup>又<sup>また</sup>  
津<sup>つ</sup>親<sup>おや</sup>族<sup>むらじ</sup>の事<sup>こと</sup>あり何<sup>なに</sup>とて疎<sup>そ</sup>略<sup>りやく</sup>

多々東や備へ月小玉杖管領と  
名しる人へ——と有り赤某<sup>あか</sup>某<sup>あか</sup>  
者代へ侍披官の筋目<sup>すぢめ</sup>あらんを  
白後進<sup>しろごしん</sup>を卒<sup>すつ</sup>でる疎<sup>そ</sup>をこ存<sup>ぞん</sup>む  
をふと系<sup>けい</sup>極<sup>ごく</sup>度<sup>ど</sup>もその筋目<sup>すぢめ</sup>と名  
をふおるくいの有難<sup>ありがた</sup>うるべ——と  
礼<sup>れい</sup>をそとてりりたりけ人  
多々久——子願<sup>こね</sup>主<sup>も</sup>之石田<sup>いしだ</sup>を地下<sup>ちか</sup>の

百姓<sup>ひやくしやう</sup>故<sup>こ</sup>村<sup>むら</sup>の如<sup>ごと</sup>くの中<sup>なか</sup>りあり  
物<sup>もの</sup>に元<sup>もと</sup>来<sup>きた</sup>一<sup>いつ</sup>交<sup>かう</sup>せむる人<sup>ひと</sup>を  
其<sup>その</sup>上<sup>かみ</sup>智<sup>ち</sup>意<sup>い</sup>深<sup>ふか</sup>く丈夫<sup>ぢゆうぶ</sup>の心<sup>こころ</sup>を  
ゆへに下<sup>した</sup>の心<sup>こころ</sup>を感<sup>かんと</sup>むるも志<sup>し</sup>を  
年來<sup>ねんらい</sup>け好<sup>この</sup>身<sup>み</sup>と名<sup>な</sup>りぬく被<sup>か</sup>是<sup>こゝ</sup>と  
也<sup>や</sup>厚<sup>こう</sup>意<sup>い</sup>の隠<sup>かく</sup>糸<sup>いと</sup>けり  
餐<sup>はん</sup>意<sup>い</sup>——りり世<sup>せ</sup>麻<sup>ま</sup>系<sup>けい</sup>極<sup>ごく</sup>衆<sup>しゆ</sup>此<sup>こゝ</sup>  
一<sup>いつ</sup>をこ隠<sup>かく</sup>長<sup>なが</sup>成<sup>なる</sup>——あり

安養寺之序九条の... 是編一ノ由當亦此由運... 南越一入り来り... 今是長小... 南越一入り来り... 今是長小... 南越一入り来り... 今是長小...

君の由武常... 名を揚め... 今是長小...

手此内... 平... 今是長小...

率忽乃... 今是長小...



まを石田喜人越教してても大垣  
より大軍寄せ来り又佐和山より  
も子供ありびり家人お良附  
に押来りてく矢國を攻討べし  
強りて於て十日亦日此若くは  
あくしててい叶わぬていば  
し高城も日づつ或子の軍を  
攻めりてく大軍ぬる物玉勢あり

戦うひの危ううるべしとりや  
りり時月之所左巻つものいそく  
いや三城を固人平さると記さ  
大坂城内も唯々忙をさして  
大い平作せししてる人の話も  
あるあるあり又百一石遠ひ龍共  
押寄せ来りてく遙く言ふに  
時は是進し及ぶ君臣お修

石田を殺して生害をば  
あり是れもけぬく志うぐひ  
へと知れぬる若角お徳  
のりは此時流るの三率ある  
何とやせん物騒がしき振子  
お知し酒中醜事して徳和山  
へ向りしう言次が心変せざる  
形乃其の跡を知らりそむく

石田が徳畧のまゝなるあり  
この時より高次乃心二変り  
て徳平何れもといふるあり  
せん彼乞と延引する其乞石  
田が徳斗之

細川幽斎田辺乃城城ある事  
并勅使も仍て田辺の事も退変

斯く丹後の國回遊乃博多細川  
玄妙左輔及孝入及玄旨出等  
内府公の御公達る〜び小女中  
が〜と書候して居りし哉  
攻殺さんとして強向ふめん  
よ小登木隆慶之介 及三河  
守 谷出守 小堀伴野守  
回考後守 別和豊前守 生約

右近等因情但馬 伯耆三ヶ玉  
の軍兵部金二万六千余騎  
慶長六年七月晦日大坂城  
して丹後の國は發向也細川  
幽舟と國守文津の城に居  
りしが徳勝加賀守前公  
内府公の御公達る〜び小女中  
が〜と送り候も右同列回遊の

城多望園の地るれば迎は城よ  
楠麓る柞幽奇は足利拾二代の  
將軍義晴の御胃よして長園を  
願するにまつく別ら古名城  
中書と号は城る小細川右馬  
頭の子と成く象明岸此  
和回子福をり生均武骨の  
建人とい又世子知く是く歌

人ありされば多を流  
智彦有て信代の家人留る居  
れをうれは流るおぬ百余人城  
集めて回迎の城も楠るのり  
武骨と願りして大軍は奇也  
来る城まらつ亦奇人の形あり  
今く結りく幽奇は景庵集  
とて奇書あり古太閤をこの

幽奇とば歌人ありと譽ふ  
吾命襲子出仕の時古岡以強  
細川二ツつ寸出たりと傳せの  
幽奇の教  
御石車通りし  
と上の句と縁續けたり  
其頃の秀歌あり又古今三  
等の傳授るるび千古等此

源氏をとりてりは時の  
帝後陽成院深く至る  
少々の歌と一幸  
小玉にて目ごら  
源氏ありび千三鳥は傳授  
成廣橋大納言度近  
清和源氏の傳授  
徳川家乃概奏之仍て幽奇は

源氏をとりてりは時の  
帝後陽成院深く至る  
少々の歌と一幸  
小玉にて目ごら  
源氏ありび千三鳥は傳授  
成廣橋大納言度近  
清和源氏の傳授  
徳川家乃概奏之仍て幽奇は

傳奏<sup>て</sup>對<sup>て</sup>

内府<sup>の内</sup>の<sup>西</sup>足

弱<sup>を</sup>弱<sup>り</sup>り<sup>に</sup>後<sup>に</sup>敵<sup>を</sup>免<sup>は</sup>仕<sup>は</sup>る<sup>る</sup>業<sup>を</sup>

て<sup>し</sup>師<sup>を</sup>不<sup>し</sup>令<sup>し</sup>此<sup>を</sup> 勅<sup>を</sup>後<sup>に</sup>の<sup>し</sup>じ

難<sup>か</sup>く<sup>も</sup>今<sup>に</sup>敵<sup>を</sup>上<sup>に</sup>ま<sup>ら</sup>ふ<sup>と</sup>言<sup>ふ</sup>と<sup>は</sup>又

是<sup>を</sup>侮<sup>へ</sup>り<sup>て</sup>逃<sup>が</sup>す<sup>が</sup>大<sup>に</sup>敵<sup>を</sup>り<sup>て</sup>固<sup>く</sup>

ま<sup>り</sup>と<sup>し</sup>との<sup>が</sup>ま<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>謀<sup>を</sup>略<sup>を</sup>之<sup>を</sup>

世<sup>に</sup>席<sup>を</sup>大<sup>に</sup>坂<sup>の</sup>奇<sup>に</sup>手<sup>の</sup>に<sup>て</sup>或<sup>は</sup>万<sup>に</sup>又<sup>は</sup>千<sup>に</sup>

余<sup>を</sup>騎<sup>を</sup>津<sup>に</sup>浪<sup>を</sup>代<sup>に</sup>お<sup>り</sup>が<sup>ぶ</sup>く<sup>く</sup>丹<sup>を</sup>

後<sup>の</sup>國<sup>へ</sup>お<sup>り</sup>入<sup>り</sup>り<sup>て</sup>逃<sup>が</sup>す<sup>が</sup>細<sup>に</sup>川

逃<sup>が</sup>す<sup>が</sup>の<sup>の</sup>少<sup>し</sup>も<sup>も</sup>能<sup>く</sup>走<sup>る</sup>る<sup>が</sup>竹<sup>を</sup>本<sup>を</sup>地<sup>を</sup>

伐<sup>り</sup>り<sup>て</sup>自<sup>ら</sup>燒<sup>く</sup>く<sup>て</sup>大<sup>に</sup>軍<sup>を</sup>屯<sup>を</sup>の

便<sup>に</sup>り<sup>て</sup>と<sup>も</sup>失<sup>は</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>せ<sup>に</sup>裸<sup>に</sup>城<sup>を</sup>して

本<sup>に</sup>城<sup>を</sup>楯<sup>を</sup>篋<sup>を</sup>る<sup>る</sup>又<sup>は</sup>百<sup>に</sup>余<sup>に</sup>人<sup>の</sup>の<sup>の</sup>承<sup>を</sup>

免<sup>は</sup>る<sup>る</sup>故<sup>に</sup>く<sup>も</sup>石<sup>を</sup>擧<sup>げ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>も</sup>り<sup>て</sup>大<sup>に</sup>筒<sup>を</sup>

銃<sup>を</sup>炮<sup>を</sup>を<sup>し</sup>仕<sup>を</sup>を<sup>り</sup>り<sup>て</sup>細<sup>に</sup>玉<sup>を</sup>擧<sup>げ</sup>の<sup>の</sup>押<sup>を</sup>

つ<sup>ら</sup>ら<sup>と</sup>と<sup>も</sup>心<sup>を</sup>く<sup>く</sup>細<sup>に</sup>波<sup>を</sup>の<sup>の</sup>産<sup>を</sup>

城揚あけく四方八面より追取おとる  
唯一ひと慮しの攻破せきせんといひ  
とも城名しやうめいの陥おちく階かゝりし  
くちりて三日三夜殺ころす日本  
小楠こくす籠かこむるも三の捕とらへ  
敵手あつち搦破なほらるるも  
うろろ夫々それぞれ人々ひとも  
扇あふきばおちるる言いはれ  
何程いかに大軍

よて近東ちんとう肉にくより攻殺こうころするを  
体てい之の始はじりに 禁裏きんりにおありて  
沸洋わいやう定さだむる事こと 尚なほ他た古こ今いま此こゝ傳でん  
授おと承じやうく奇道きだうさるるも  
いそ紀伊きい扱あつかひるべし  
勅しやく仗じやうとして三條大納言さんじやうだいなごんとの  
丹後たんごの國くには下向げかう之の逃にげ奔ほんする  
城しろに有あり難がた身み所ところ也

世にそと奇人極の中は  
古今此傳授の有り能き  
如極乃其一人を惜まんと  
傳授ひよ如りたりと其の  
本もと養ひて自強を全う  
是より本意を旨く古今  
此傳授より公家堂上  
より傳授の人々も

て幽奇人平限  
をよびりまゝに  
あくとも

勅使乃下向やうでよる及び  
召喚するあり

内府公乃雅奉此人あつれを  
廣橋度(内府公)の  
御公達中一所に責教を



さしつかへなく送る候  
く 榎本堂より  
園東のむねをこれ申すれども  
以構ひある事さしつかへも  
このさびしき極ひある事  
を 内府公より  
申す事さしつかへなく  
勅使の下向今更細川

減 ありて日本此より  
棄つてさしつかへなく  
軍兵と退きけり  
をまよとの事あり  
候も 勅使下向ありて  
と成りては事なれども  
此下何れより王去ふ  
らんや末代より

勅命を省き強しと今一攻に  
責落しまた子田色一の城を以て  
涉扱ひの  
國とて冥妻らんば幽奇の  
内府公の涉公達るるにびり  
女中守とて涉とて是しとて  
勅定御書しと母後の國り山  
中しと涉く志のびりりとの

以後國ヶ系は涉陣しと細川越  
中守辛夷執しと殿しとらる  
是おの事有故也仍る父子とも  
軍師大い子孫れは色ば又松二言  
石の知りしと活りりて結の糸よ  
敏急業も絶る子嬌子執中も  
志奥の心慮もと田色一の城を冥  
きて小孫木と武骨と振り色し



車一志一河川にて難をらん  
と一らん若西玉方と目小余ら  
大軍を大谷吉盛智謀将  
少一子此態は丸を人質と  
て大谷よきり一子月吉盛  
と同伴して小玉は發向あり  
解ひいりぬ良將もせこの  
乱世に報をよき報り一報を

小玉節の長妙伝るるのうらび  
今津へ發向する津川は此  
手よる北州乃前田利長を惣大  
將小定められしに  
内府公より書札送りて加急  
以下知あり小玉定は此の法大志  
誠惶悚して同報出法を  
とのりあり志るるに東を急此

ふ。河内く丹羽加賀と長重水  
敵と奴多小玉志づりあるは  
元来長重と佐藤は縁造く  
二の冥東方より前守加賀  
陣涉沙塔の時先列して  
内府公は河内をこし本玉加賀  
小松の城は陥りて前田家は振子  
城よりしほ城よりしほ

大ひ千不和なり丹羽家も日新  
も百万石の大名ありといふ  
南時をやりく加洲小松の城主  
よして拾二万石ありといふ  
其武勇も金利ありといふ  
あとのうび利もなり  
佐老来る其に人あり金津の  
向て背つては同体とてあり

是私こぼし小瓶こびん火宮ひみや車くるまの  
所ところ下知したち也なりやうやう云い送くわりらんんのの時とき  
長ちやう重じゆう大だいのの平へい一いつ婦ふ子しててこころろへ  
ささるる利り出しのの使し者しや也なり永えい不ふ省せう之し  
ととりりへへ有ありり前まへ回くわい家け此こゝ籍せき下かりり身みで  
出し張ちやうままへへとと振しんりり又また  
内うち府ふ公こうももここののここびびのの列りゅうにに  
秋あき未み方かたへへもも出し陣ちんせせららのの沙さ汰た

ののままへへととささるるありあり既すでにに前まへ回くわい利り  
長ちやう隠いん謀ぼうのの沙さ汰た是こゝるる時ときとと加か別べつ  
家け此こゝをを返かへてて伺かへぐぐととりり何なに条じょうのの  
指さしのの子こ有ありりもも前まへ回くわい家け此こゝ下か知ち  
小このの身み局きよく受うけけ之しととててここのの時ときのの返かへ  
苦くるもも亦また同どう度ど也なり出し張ちやう絞しやくささららるる身み  
丹に羽う家けとと極ごく急きゆう絞しやくささららるる事ことにに  
由よし難がたしし其その度どもも亦また同どう度ど也なり以もつ指さし手て

次身の出張是るべし  
その病を尋ねるべし  
お探さるべき之の返答を  
これを書きしる利長大  
長重は秋下知茂  
渠もお探さるべく出張する時  
必定去るべきに  
と云ふ今津の發向は

とも小松部をてい  
あんなまの小松の城攻  
て出張せんといふ  
又この節石田三成  
加判大重と云ふ  
執事の圓小の  
書も御款  
又大谷刑部少輔

執事の國敦賀の概  
取手北西大乱  
及び  
油漬

冥々京軍記二編  
花の二  
油漬

翻譯書

倭軍書

唐軍書

隨筆物

國々名所

近世戦争書類

右々外數品  
所  
控奉  
也

書物  
所

繪本

書本

滑稽物

曲亭馬琴之作  
其外諸先生作

車書  
敵討  
諸家騷動  
御搦物

東京牛込細工所

誠光堂  
池田屋  
法吉



